

# 「～てください」の機能について

— 「～てください」は依頼か —

関 根 和 枝

When Japanese beginner class students study “-te form”, they study “-te kudasai” for an expression of request. But Japanese native speakers often feel it impolite, although they also use “-te kudasai” for a request, for example, “Tasukete kudasai. (Please help me).” This paper examines when an expression with “-te kudasai” is perceived impolite. The result indicates that native speakers of Japanese usually perceive such expressions with “-te kudasai” as order. Moreover it is also found that when native speakers ask someone to do something, they use more indirect expressions. Native speakers of Japanese also consider various elements such as social distance, power, social status, situations, environments, effect to others, and so forth. This paper demonstrates that for the non-native speakers of Japanese to use “-te kudasai” in requesting correctly, the following three points important: (1) to know the pragmatic function of “-te kudasai”, (2) to know the fact that Japanese tend to use more indirect expressions, (3) to recognize Japanese social standards for request.

Key words : “-te kudasai,” request, politeness, Japanese perspective, social standards

## 1. はじめに

日本語学習者が「～てください」を使って依頼をする時、日本語母語話者が聞いて、違和感を抱いたり少し失礼だと感じたりすることがある。例えば、上級クラスの会話で、

(1) 日本語教師 a. (話題になっている) その本なら私の家にありますよ。

日本語学習者 b. 先生、明日、持ってきてください。

この b の発話に対し、日本語母語話者の教師はどのように感じるだろうか。この「～てください」は「お願い—依頼」だろうか、「指示」だろうか。

日本語教育では、初級前半の「て形」学習の際、テキストで「～てください」が「依頼として」提示されることが多い。学習者は、自身が発話する「教えてください」を延長し「～てください」は「依頼」全般に使用できる表現だと判断して、上級レベルになってもそれが修正されない場合が見受けられる。しかし実際には、そのような認識で学習者が「～てください」を使って依頼し、日本語母語話者に「失礼だ」と思われてしまう場合がある。

「～てください」は、どのような時に失礼な依頼となり、または、ならないのであろうか。本稿では学習者の「～てください」の危険性を回避する為に、表現「～てください」に焦点を当て、日本語社会での依頼表現の使用規定因を探ることにする。

本稿では初めに、「依頼」、「丁寧さ、失礼さ」について検討し、次に表現「～てください」

を含めた依頼表現の使い分けについての先行研究を概観する。そして行動要求表現に於ける「～てください」という表現の位置を検証していく。

## 2. 「依頼」とは

蒲谷・川口・坂本（1998—以下「蒲谷, 1998」とする）は、「依頼」表現を「相手の行動によって自分の利益になることを叶えようとする」（「」は筆者加筆）ための表現だとし、『依頼』の行動決定権は相手にあり、『指示・命令』は行動決定権が話し手にある」とする。そのため、依頼された相手は断ることもできるが、指示・命令の場合は断ることが難しい。

- (2) a. 会食の席で、自分から遠くて取れないので近くの人に「すみませんが、その塩を取って下さい。」〈依頼〉
  - b. 試験で、試験官が受験者に「まず、名前を書いて下さい。」〈指示〉
  - c. お客に、自作の自慢料理を指して「ぜひ、これを召し上がって下さい」〈勧め〉
- 次に「丁寧さ、失礼さ」について先行研究を見る。

## 3. 「丁寧さ、失礼さ」とは

ブラウンとレビンソン（Brown & Levinson, 1987—以下「B&L, 1987」とする）は、依頼は相手のネガティブ・フェイス（negative face）を脅かすことなので、ネガティブ・ポライトネス（negative politeness）ストラテジーとして間接的な表現を使うことを挙げている。岡本（1991）はリーチ（Leech, 1983）を引き「間接化によって配慮が示される理由は、相手が要求に応ずるか応じないかを選択する自由度を増すためだ」としている。依頼する際には、相手（以下依頼の「受け手」とする）の負担に配慮して丁寧に頼むことが必要となる。「丁寧さ」を欠くと感じられた時、「失礼さ」が発生する。配慮を示す表現方法として日本語の間接的な表現と直接表現の例を岡本（1989）「依頼表現の分類」を基に(3)に示す。

- (3) a. 直接表現…それを取って下さい。
  - b. 間接的な表現…それを取って下さいますか。〈やりもらいの補助動詞・疑問形〉  
あの、ちょっとそれを…。〈言い差し、負担軽減の副詞、遂行動詞・文末省略〉等
- 談話形式上で配慮を示す方法（受け手の受け入れ態勢を確認したり、前置き文を添える等）もあるが、本稿では「～てください」を中心に、依頼「表現」に焦点を当てる。次節では依頼表現が何を基準に使い分けられているのかを先行研究で探る。

## 4. 依頼表現の使い分けについての先行研究

「～てください」は、「～てくれ」「～て。」に対して「ください」があるので、敬語に属する。しかし、補助動詞の使用や疑問形などの緩和表現を取らないので、要求を間接的に表現する形式ではなく、要求を直接的に表現する形式である。（岡本, 1989, 1991, 等々）<sup>(注1)</sup>。直接表現「～てください」では、フェイスへの配慮や断りやすさを表わしにくい。

「～てください」の意味は、先行研究により、(2) a.b.c.が示すように依頼・指示命令・勧めの意味を備えた汎用性の表現であるが、指示・命令での使用が多いことが指摘されている（柏崎, 1991; 姫野, 1991）。

その一方で、運用上(4) a.b.c.のように、依頼として直接表現「～てください」が失礼

にならない場合が先行研究で挙げられている (B&L,1987; 石川・無藤,1990; 岡本,1991)。

- (4) a. 緊急・切迫した場合。「救急車を呼んでください。」
- b. 役割・仕事として双方が納得している場合。「(店員に)ギフト用にしてください。」
- c. 双方が利益を得る場合。「分からない事があったら、遠慮なく手を挙げてください。」

では、これらの場合以外の日本語の依頼で「～てください」を含め、直接表現と間接表現の使い分けの基準は何であろうか。先行研究では、次の要因が挙げられている。

- i コスト(負担。岡本 1989,1991 等々では受け手の負担を「コスト」とするので、本稿もそれに従う)の大小(岡本,1989)
- ii 受け手の社会的上下親疎(河戸,1997)
- iii 受け手と話し手の心的距離(金,1996; 猪崎,2000)
- iv 依頼の場と依頼内容が受け手にふさわしいか(蒲谷,1998 では、受け手の役割を超えた依頼を「用件レベル」を超えた、と表現している。)

さらに蒲谷(1998)は表現の運用という視点から、日本語の行動要求で、指示・命令を依頼表現で表出する「あたかも丁寧な運用」(蒲谷,1998 では「あたかも表現」)にも言及している。

このように様々な要因で依頼表現を使い分ける日本語社会において、日本語母語話者は学習者から「～てください」と依頼された場合にどのように感じるか、本稿ではそれを調査し「～てください」の汎用的使用の危険性を探る。

## 5. 調査

### 5-1. 調査の方法

日本語母語話者に「～てください」が依頼として受け取られるかどうか、また、日本語母語話者ならどのような表現を使うか、について紙面アンケートで調査を行なった。調査対象を日本語教室の日本語母語話者の教師とし、日本語学習者(以下、「学生」とする)が教師に発話した「～てください」を調査することで上記依頼表現の選択基準 ii の上下親疎を統一し、また、iv での依頼の場を教室という公的な場に統一した。

### 5-2. アンケート調査

アンケートは、7つの日本語教育機関の日本語教師 41 名に行なった。7つの教育機関の種別は、日本語学校、大学の留学生センター、ボランティアの日本語クラス、日本語教師養成機関であり、教室で接する学生の総体的な国籍については中国人が多いというような偏りは無い。また、回答者は合計 41 名(うち男性 5 名)の全員が日本人で、日本語母語話者である。年代の人数内訳、日本語教育歴は表 1 の通りである。

表 1 <年代の人数内訳>

<日本語教育歴>

(未記入 1 名)

| 年齢(代) | 20 | 30 | 40 | 50 | 60 | 年数(年) | 無し | 1年未満 | 1～2 | 2～3 | 3～4 | 5年以上 |
|-------|----|----|----|----|----|-------|----|------|-----|-----|-----|------|
| 人数(名) | 7  | 12 | 14 | 4  | 4  | 人数(名) | 5  | 6    | 7   | 2   | 2   | 18   |

表1の様に年齢、経験年数につき幅広い回答者から回答が得られた。実際の社会でも、依頼の受け手はさまざまな年齢や社会経験を背景として依頼に対して印象を持つことを考えると、アンケートとして妥当な結果が得られたと思われる。

アンケート内容は、前述7つの機関とは別の、ある1つの教育現場の上級クラスで実際に自然発生した学生から教師への「～てください」を使った依頼場面に対する、複数の日本人教師の反応をパイロットスタディとした。そこから見出された依頼の観点を筆者は表2に示す様に「基底」・「1」～「4」の5つに整理して計11場面を設定した。

表2 アンケートの場面と観点

| 場面と観点   | 場面の状況  |
|---|--|
| 【基底】フェイスを脅かす行為である「教師の仕事の領域への侵入」に対して「～てください」という依頼が受け入れられるか——                                     |  |
| 場面1＜学習順序＞<br>教師の領域  | 教師が授業計画で学習順序変更を学生に説明した時、「～た方がいいと思います。〇ページからやってください」と変更前の順序を依頼                            |
| 【1】「教師のコスト」依頼により受け手にかけるコストの大小の差、受け手に精神的コストをかける依頼に対して「～てください」という依頼はどのように受け取られるか——                |  |
| 場面2＜板書＞<br>教師のコスト   | 教師が口頭での10問の正解提示を始めた時に「書いてください」と依頼  |
| 場面3＜多く板書＞<br>教師のコスト大  | 教師が口頭で35問の問題の正解提示を始めた時に、「書いてください」と依頼   |
| 場面4＜板書時間無＞<br>教師の心的コスト  | 授業の終了時間が迫っており、35問の正解提示を口頭なら、時間内にできそうであったため口頭で始めた時に、学生が「書いてください」と依頼                       |
| 【2】「一部分の利益」一部の学生の利益のための依頼が、他の学生（第三者）にとり不利益になる可能性がある依頼は、「～てください」という表現で受け入れられるか——                 |  |
| 場面5＜後S音大に＞<br>後学生の利益・第三者  | 聴解練習で、テープの位置から遠い、後ろの席の学生が、「音を大きくしてください」と依頼   |
| 場面6＜前S音小に＞<br>前学生の利益・第三者  | 聴解練習で、テープの位置から近い、前の席の学生が、「音を小さくしてください」と依頼  |
| 【3】「用件レベルを超えた依頼」受け手の役割（用件レベル）を超えた依頼が必然性のあるものであった場合と必然性がない場合とで、「～てください」という表現での依頼の受け取られ方に違いがあるか—— |  |
| 場面7＜エアコン外＞<br>必然性と教師の役割<br>(用件レベル)  | 授業で筆記問題中、教室が暑いと感じた学生がエアコンのスイッチが教室の外にある為、教師に「先生、暑いですから、エアコンをつけてください」と依頼                   |
| 場面8＜エアコン内＞<br>必然性無と教師の役割<br>(用件レベル)   | 授業で筆記問題中、教室が暑いと感じた学生が、教室の中にエアコンのスイッチがあり、扱いは学生・教師任意であるエアコンを「先生、暑いですから、エアコンをつけてください」と教師に依頼 |
| 【4】「個人の依頼提示の場と内容」「～てください」という依頼の受け取られ方は、依頼の内容、状況、場面に影響されるか——                                     |  |
| 場面9＜テープ追聴＞<br>学習内容・意欲・第三者   | 聴解問題答え合わせの時2度テープを聴き、終了後、次の学習に移ろうとした時、一人の学生が「先生、もう一度かけてください」と依頼                           |
| 場面10＜本もっと見＞<br>学習内容・興味・状況   | 教師が授業の参考のためにクラス全体に写真の本を見せ、それをしまつて次の課題に移ろうとした時、一人の学生が「先生、（その本を）見せてください」と依頼                |
| 場面11＜願書＞<br>個人的内容・場   | 問題演習中に、一人の学生が机間巡視の先生を呼び止めて「先生、後で、私の願書をチェックしてください」と依頼                                     |

そしてこれらの場面について以下の2つの質問への回答を求めた。

＜アンケート①＞その場面の「～てください」という依頼が失礼だと感じるか否か。

そして、その判断理由の記載。

＜アンケート②＞日本語母語話者である回答者なら、その場面でどのような表現で依頼をするか（又はしないか）、依頼表現の記載。

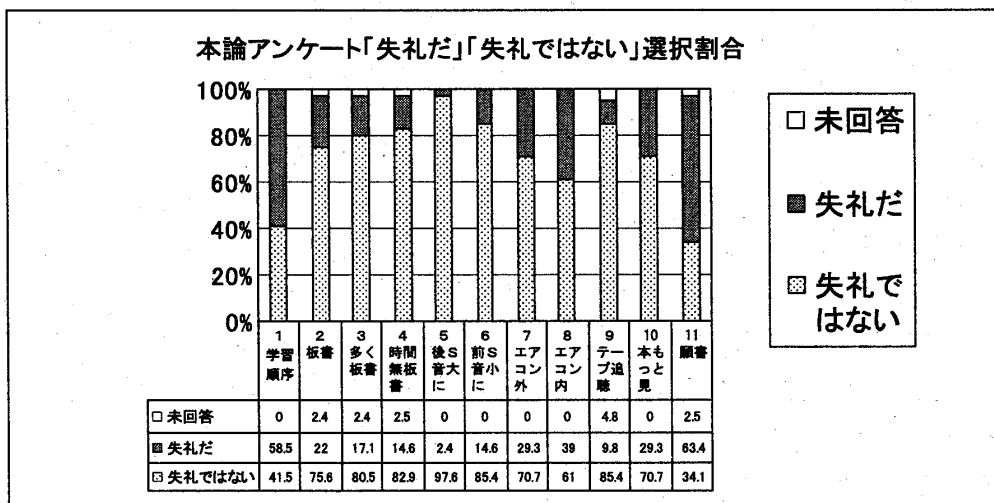
上記の場面に補助的にイラストを加えたアンケート調査用紙を各機関に依頼した。次節では、その結果から日本社会での依頼表現の中で「～てください」が使われる選択基準を探っていく。

## 6. アンケート調査結果と考察

### 6-1. ＜アンケート①＞の結果—「～てください」という依頼に対する判断と理由—

＜アンケート①＞では、依頼表現「～てください」の失礼さの有無について日本語母語話者は、「～てください」と依頼された場合、どのように感じるか、それはなぜか、「場面」に於ける表現選択の「理由」即ち回答者が見出したその場面の観点を探った。

グラフ1



まず、それらの場面での「～てください」が失礼かどうかというアンケート結果は、「失礼だ」が、場面1＜学習順序＞で41名中24名(58.5%)、場面11＜願書＞で26名(63.4%)と、この2場面に於いては「失礼だ」が「失礼ではない」を上回った。反対に最も「失礼だ」が少ないのは、場面5＜後S音大に＞であり、1名の回答者以外は全員が「失礼ではない」(97.6%)とした。他の場面では「失礼ではない」という回答が60%以上であった。次に、「失礼・失礼ではない」判断理由を見る。

アンケートのコメントから判断理由は、「～てください」という表現に対するコメント、H1,H2,H3と、内容などその他の要因に対するコメント①～⑩にまとめられた。それを、「失礼だ」と回答した回答者が挙げた理由を【失礼だ】に、「失礼だとは思わない」と回答

した回答者からの理由を【失礼ではない】に分類した。そして、場面と「失礼」「失礼ではない」理由、その理由（コメント）記載数を表3にまとめた。

表3 場面別「失礼だ」「失礼ではない」理由と理由記載数

数字は理由記載数

| 場面                 | 1  | 2 | 3  | 4 | 5  | 6  | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 |
|--------------------|----|---|----|---|----|----|---|---|---|----|----|
| 【失礼だ】              |    |   |    |   |    |    |   |   |   |    |    |
| H1 表現が指示・命令・丁寧さ不足  | 8  | 6 | 6  | 3 | 1  | 1  | 8 | 6 | 1 | 2  | 6  |
| ①教師の仕事・領域への意見・侵入   | 13 |   |    |   |    |    |   |   |   |    |    |
| ②教師の説明を無視          | 7  |   |    |   |    |    |   |   |   |    |    |
| ③教師に依頼せず自己解決の努力を   |    | 3 |    |   |    |    | 5 | 9 |   |    |    |
| ④教師への配慮が無い         |    |   |    | 1 |    |    | 1 | 3 |   | 1  |    |
| ⑤クラス授業という状況への配慮が無い |    |   |    | 2 |    |    |   |   | 1 | 9  |    |
| ⑥他の学生（第三者）への配慮が無い  |    |   |    | 1 | 1  | 7  | 2 | 2 | 1 | 1  |    |
| ⑦教師に非があると責めている     |    |   |    |   |    |    |   |   |   | 1  |    |
| ⑧突然の依頼だから          |    |   |    |   |    |    |   |   |   |    | 1  |
| ⑨その内容を依頼する場ではない    |    |   |    |   |    |    |   |   |   |    | 21 |
| 【失礼ではない】           |    |   |    |   |    |    |   |   |   |    |    |
| H2 表現は変えてもいい       | 1  | 1 |    |   |    |    | 2 | 2 |   |    |    |
| H3 状況的に簡潔な表現が良い    |    |   |    |   | 5  | 3  |   |   |   |    |    |
| ⑩当然の依頼だ            |    | 6 | 7  | 9 | 17 | 10 | 8 | 5 | 5 | 4  | 1  |
| ⑪その依頼は良いことだ        |    |   |    |   |    |    |   |   | 8 | 4  |    |
| ⑫第三者の為にもなる         | 1  |   |    |   |    |    |   |   | 2 |    |    |
| ⑬学生の事情への思いやり       | 1  | 8 | 11 | 3 | 1  | 1  |   |   | 1 | 2  | 1  |
| ⑭意見を受け止める          | 6  | 1 | 2  | 3 |    | 3  | 2 | 2 | 1 | 2  | 2  |
| ⑮教師の義務             |    | 3 | 3  | 2 |    |    | 1 | 1 |   |    |    |
| ⑯教師側に非がある          |    |   |    | 6 | 2  |    |   |   | 1 | 1  |    |
| ⑰何とも感じない           | 1  | 1 |    |   |    |    |   | 1 |   |    | 2  |

表3を概観すると、「～てください」が「失礼だ」という理由は、「表現に丁寧さが無い」、「失礼ではない」は、「当然の依頼だから」という意見が多い。一方、場面別に見ると、一つの場面にも様々な理由（回答者が見出したその場面の観点）が挙げられていた。以下に理由を分析していく。

まず、表現についてのコメント、H1～H3を見る。「～てください」という表現が「失礼だ」と判断した理由H1は、「お願いになっていない」「命令しているようだ」というものであった。これは、先行研究で指摘されていた「～てください」が指示・命令寄りの表現だということに該当する。一方、「～てください」が「失礼ではない」という理由は、理由H2「もう少し丁寧な言い方もあるが、相手の役割に対する権利としての当然の要求なので失礼ではない」、理由H3「時間が無いので、簡潔な表現がふさわしい」という意見で

あった。これらも、先行研究の「相互が認める役割性」、「緊急・切迫」に該当するであろう。

このように、「～てください」という表現は、場面により「依頼」として認められる場合と、「指示・命令だ」と受け取られる場合とがあることが先行研究と同様、本調査でも示された。では、本調査では「依頼」として受け取られる場合と「指示・命令」として受け取られる場合の違いは何が原因だとされたのであろうか。次に、各場面に挙げた理由を、アンケート設問の〔基底〕〔1〕～〔4〕の観点とあわせて見ていく。

〔基底〕 場面 1<学習順序>については、①の理由、「授業の指導権は教師にあると思うから」「先生のやり方に文句を言っているように感じる」等という意見が多く、教師のフェイスを脅かすので失礼だ、ということであろう。

〔1〕 場面 2<板書>～場面 4<時間無板書>「教師のコスト」については、先行研究 i のコストが大きくなると配慮表現が多くなる、という結果と異なり、場面 3<多く板書>のようにコストが大きくても場面 4<板書時間無>のように受け手に心的コストを与えるものであっても「当然の依頼」で、学生からの「～てください」について、「失礼ではない」とした。また、場面 2, 3 では⑬の理由「学生の事情への思いやり」、例えば「番号を聞き取るのが苦手だから不安だったかもしれないから」という理由が、場面 4 では⑭の「学生に改善要求をさせる教師に非がある」という理由が挙がっていた。しかし、場面 2, 3 に挙がらなかった「配慮も必要」というコメントもあった。

〔2〕 場面 5<後 S 音大に>・場面 6<前 S 音大に>「一部分の利益」については、場面 5<後 S 音大に>の後ろ学生の利益については、⑩のように「学習する上で当然の権利であり、要求である」という理由で、100%に近い回答者から「失礼ではない」という回答を得た。一方、場面 6<前 S 音小に>では、⑩の「当然だ」以外に、⑥のように「前学生の利益は第三者の利益を損なう恐れがある」ので、「失礼だ」という意見が 7 例挙がっていた。依頼者にとっては当然の依頼であっても、第三者への配慮が必要だと考えられているのではないだろうか。

〔3〕 場面 7<エアコン外>・場面 8<エアコン内>「用件レベルを超えた依頼」については、場面 7<エアコン外>は授業をするという教師の役割から見れば教室外にエアコンをつけに行くことは用件レベルを超えた依頼であるが、必然性があるので⑩のように「当然の依頼だ」と受け止められていたが、表現について、H1 のように「～てください」は「丁寧さが足りない」という意見も目立った。更に場面 8<エアコン内>では、③のように「学生自身が解決できることであり依頼の必然性が無いので、教師の役割（用件レベル）を超えた依頼をする事自体が失礼だ」という意見が 9 例挙がっていた。即ち、まず、依頼をしなければならないかどうか、次に、用件レベルを超えているので、「～てください」は丁寧さが足りない、という意見であった。

〔4〕 場面 9<テープ追聴>～場面 11<願書>「個人の依頼提示の場と内容」については、場面 9<テープ追聴>では⑩のように「学習内容に意欲を示し、好ましい」という印象を受け手に与え、自己中心的な要求という判断より「第三者のためにもなる」という判断がなされ、「失礼ではない」が多かった。しかし場面 10<本もつと見>では、学

習内容に興味を示したという見方もあったが、⑤のように「授業が進んでいくという状況を鑑みず、自分だけの要求を提示したことが、周囲の状況を配慮しない」という点で「失礼だ」とする意見が9例挙げられた。更に、場面11<願書>では、⑨のように「個人的内容の要求を公の場ですることには、『失礼だ』とする意見が多かった。

以上のように、観点[1]「教師のコスト」は、先行研究i「コストが大きいと緩和表現が用いられる」とは異なる結果が出たが、それ以外では、[基底]でのフェイスへの脅威、[2]での当然の権利と利益の範囲、[3]での依頼の必然性と用件レベル、[4]での場と内容の適切性に対し、設問が意図する観点に沿った理由が挙げられていた。

さらに、上記の観点に対する「理由」の中で、設問の観点に含まれていなかったその他の「理由」も回答者から寄せられた。それは、基底場面で「説明しているのにそれを聞かずに要求している」という失礼さ(リーチ, 1983の「合意の格率 (agreement maxim)」に反すること)、また、「学生を思いやるので」という、回答者の意識から「失礼だとは思わない」という意見が、[1]「教師のコスト」場面を中心に各場面で散見された。これは先行研究iii「心的距離」が該当し、心的距離が近いと「～てください」は「受け手から」「配慮を欠いたとは意識されない」のだと思われる。更に、「受け手への配慮」は理由として各場面で挙がっていたが、先行研究では挙がっていない「周囲の状況への配慮」「第三者への配慮」が、アンケートから得られた新しい観点であった。

一つの場面に多く挙げられた理由は、それがその場面で依頼の際に母語話者が意識する観点であると判断し、日本語母語話者の依頼の判断傾向を探るために、表3から各場面で上位3つの理由(観点)をその場面の要素に対する代表的観点として取り出し(網かけ)、各場面の観点の特徴を見ることにする。「失礼だ」という回答者からの理由は〈 〉で括り、「失礼ではない」という回答者からの理由は{ }で括る。

まず、場面1の代表的理由は、〈教師の領域への侵入〉〈表現が指示〉〈教師の説明無視〉である。場面2の理由は場面3理由と共通し、{学生への思いやり}、{当然の依頼}、〈表現が指示〉であった。場面4も{当然の依頼}{教師側に非}と失礼ではない理由であったが、〈配慮-④⑤⑥の計〉もあった。場面5, 6は{当然の依頼}が共通で、しかも場面5では{簡潔表現が良い}という理由が加わっていた。一方場面6では〈配慮-第三者〉が加わった。場面7, 8も理由に共通性があり、{当然の依頼}と〈自己解決すべき〉という理由が代表的であり、〈表現が指示〉という理由も目立った。場面9は場面10と{当然で良い事だ}という理由が共通していたが、場面10では〈配慮-クラスの状況〉という「失礼だ」の要素が加わった。場面11は「失礼だ」の理由のみで〈場と内容が不適切〉〈表現が指示〉であった。

次に、これらのよう理由-観点から依頼表現を選択する日本語母語話者は、自分ではどのような表現を使うかをアンケートから探る。

6-2. <アンケート②>の結果-日本語母語話者であったら、その場面でどのように言うか-  
学習者が使った「～てください」に対し、日本語母語話者である回答者自身ならどのように言うか、「場面」と「表現」とを調べた<アンケート②>の結果は、グラフ2、表4の



通りであった。

まず依頼表現として「～てください」を使うという回答は、場面 5<後 S 音大に>で 41 名中 21 名、場面 9<テープ追聴>で 10 名から寄せられていたものの、その他の場面では主に「違う表現を使う」であり、「黙っている」も場面 1<学習順序>に 25 名、場面 11<願書>に 29 名と多く、場面 10, 4, 6 でも比較的多く回答されていた。

グラフ 2

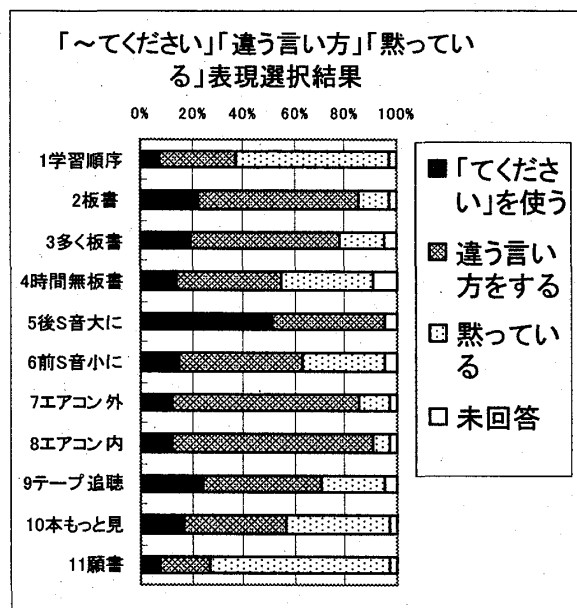


表4 「～てください」・「違う表現」の種類・「黙っている」

| 場面 | ～てください | 違う言い方をする |           |       |       |          | 黙っている |
|----|--------|----------|-----------|-------|-------|----------|-------|
|    |        | a. 表現付加  | b. 授受補助動詞 | c. 希望 | d. 許可 | e. 婉曲省略他 |       |
| 1  | 3      | 0        | 3         | 1     | 0     | 8        | 25    |
| 2  | 9      | 4        | 17        | 0     | 0     | 4        | 5     |
| 3  | 8      | 5        | 15        | 1     | 0     | 2        | 7     |
| 4  | 3      | 4        | 11        | 0     | 0     | 4        | 16    |
| 5  | 21     | 3        | 8         | 1     | 0     | 5        | 0     |
| 6  | 6      | 4        | 8         | 0     | 0     | 2        | 13    |
| 7  | 5      | 0        | 10        | 1     | 12    | 6        | 5     |
| 8  | 5      | 0        | 4         | 0     | 22    | 4        | 3     |
| 9  | 10     | 2        | 5         | 4     | 0     | 6        | 10    |
| 10 | 7      | 2        | 10        | 1     | 1     | 3        | 17    |
| 11 | 3      | 0        | 5         | 1     | 0     | 3        | 29    |

「違う言い方」の数値は記載数

「～てください」「黙っている」は回答者数

つまり、「～てください」は「依頼」として初級の教科書で提示されるが、日本語母語話者には「依頼表現」として使われることは少ないことがわかる。<アンケート①>で学生からの「～てください」は「受け手」として失礼ではないが、日本語母語話者社会で「話し手」としては「～てください」は使わない、ということである。従って、<アンケート①>で「～てください」が全体として失礼ではない、また、観点〔I〕でコストに対して直接表現が失礼ではない、という結果が出たのは「⑬学生に対する思いやり」からであり、iii「心的距離」の影響であったという事が<アンケート②>の結果からも明らかになった。

「違う表現を使う」については間接表現が多く記載され、a 表現付加, b 授受補助動詞, c 希望, d 許可, e 婉曲・省略他に分類された。分類の詳細は<sup>(注2)</sup>を参照されたい。a の表現付加は場面 3, に多く、b 授受補助動詞は場面 2, 3, 4, 7, 10 を中心に全般に使用されていた。c 希望は場面 9 に、d 許可は場面 7, 8 に特徴的であり、e 婉曲・省略他は場面 1 に多く見られた。これらの間接表現を、直接表現「～てください」からの距離で見直してみると、以下の表 5 のような距離、即ち間接性が、この a→b→c→e で順序付けられる。

表5 表現の「直接」～「間接」性

|  |
|--|
| 直接表現「～てください」   |
| → a. 「『～てください』に表現を足す」                                |
| → b. 「やりもらいの補助動詞をつけ、肯定・否定疑問形にした形」                    |
| → c. 「自分の願望・希望を表出する形」                                |
| d. 「自分の行動に対する許可を問う形」                                 |
| e. 「婉曲（ほのめかし）、遂行動詞省略、代案・提案、状態説明、<br>違う遂行動詞・表現への置き換え」 |
| → 黙っている  |

これらの表現の使い分けは、それぞれの場面の観点とどのような関係があるのだろうか。

ここで、＜アンケート②＞で得られた「表現」の使い分けと＜アンケート①＞で得られた場面の観点（理由）とを照合し、その関係から「～てください」を含む依頼表現の使い分けの基準を探っていく。

### 6-3. 「観点」と「表現」との関係

様々な依頼の要素を含む「場面」から、ある依頼の「理由—観点」を見出した時、その場面が選択された「表現」を持つということは、「場面」から抽出される「理由—観点」と「表現」とに繋がりがあるということである。その繋がりを明らかにするため、場面と＜アンケート①＞の主な「観点」の抽出結果と、＜アンケート②＞の結果であるその場面に「特徴的な表現」とを合わせたのが次の表6である。

表6 ＜アンケート①＞と＜アンケート②＞の照合表

「失礼だ」とする回答理由に〈 〉

| 場面 | 理由1         | 理由2        | 理由3        | 主な使用表現             |
|----|-------------|------------|------------|--------------------|
| 1  | 〈教師の領域侵入〉   | 〈表現が指示〉    | 〈説明無視〉     | 黙 ・ e. 婉曲・省略他      |
| 2  | 思いやり        | 当然・〈表現が指示〉 |            | b. 授受補助            |
| 3  | 思いやり        | 当然         | 〈表現が指示〉    | a. 表現付加 ・ b. 授受補助  |
| 4  | 当然          | 教師側に非      | 〈配慮—クラス状況〉 | 黙 ・ b. 授受補助        |
| 5  | 当然          | 簡潔表現が良い    |            | 「～てください」           |
| 6  | 当然          | 〈配慮—第三者〉   |            | 黙 ・ b. 授受補助        |
| 7  | 当然・〈表現が指示〉  |            | 〈自己解決すべき〉  | d. 許可 ・ b. 授受補助    |
| 8  | 〈自己解決すべき〉   | 〈表現が指示〉    | 当然         | d. 許可              |
| 9  | 良いことだ       | 当然         |            | c. 希望 ・ 「～てください」・黙 |
| 10 | 〈配慮—クラスの状況〉 | 当然・良いことだ   |            | 黙 ・ b. 授受補助        |
| 11 | 〈場と内容が不適切〉  | 〈表現が指示〉    |            | 黙                  |

この表をもとに、日本語学習者が教室以外で遭遇した依頼場面で、どのような依頼表現をすれば依頼が安全にできるかを次に考察する。

#### 6-4. 日本語社会一般に於ける依頼場面での表現選択

「～てください」か「間接表現で依頼する～黙っている」かの判断をどのようにするのかということは、場面の観点と場面にふさわしい表現とに繋がりがある為、依頼の発話者が遭遇した依頼場面でその場面が持つ観点を見出し、判断すればよいことになる。判断した観点からは日本社会にふさわしい表現が表6のように導き出される。そこで、表6を、一般的な場面での表現選択に対応させるべく、表現の直接～間接性に沿って整理したのが次の表7である。表の左側の「観点」の項目の末尾の(5), (9)等は、アンケート場面5, 場面9等に相当し、各場面を直接表現「～てください」を起点に、「黙っている」まで直接性の要素がA強い→D弱い順に並べ直した。表6を一般化し依頼の観点を見出す「発話者」の視点で観点を捉えなおして表7にするにあたり、教室関係の表現を一般化した<sup>(注3)</sup>。また、アンケートでの用語「自己解決すべき」を「用件レベル超え」に、「違う言い方」を間接表現で緩和したとみなし、「緩和表現」とした。

この表7を「失礼だ」の要素< >の多少に注目しながらA～Dを概観すると、次のようなことがわかる。

表7 遭遇した依頼場面での「観点」と「表現」との関係

「失礼だ」とする回答理由に< >

|   | 「観点」   | ⇔ | 「表現」                   |
|---|--|---|------------------------|
|   | 「～てください」                                     |   |                        |
| A | 当然の依頼だ + 簡潔な表現の方がいい状況(5)                     | ⇔ | 「～てください」               |
|   | 当然の依頼で、良いことだ(9)                              | ⇔ | 緩和表現 (c 希望)            |
|   |  |   | 「～てください」、黙っている         |
| B | ▽▼当然の依頼だ + <表現が指示> (2,3)                     | ⇔ | 緩和表現 (a 表現付加 b 授受補助動詞) |
|   | ▽ 当然の依頼だ + <用件レベル超え> + <表現が指示> (7,8)         | ⇔ | 緩和表現 (d 許可 b 授受補助動詞)   |
| C | 当然の依頼で、良いことだ + <場の状況に配慮を要する> (10)            | ⇔ | 黙っている、緩和表現 (b 授受補助動詞)  |
|   | 当然の依頼で、受け手側に非がある + <場の状況に配慮を要する> (4)         | ⇔ | 黙っている、緩和表現 (b 授受補助動詞)  |
|   | 当然の依頼だ + <第三者に配慮を要する> (6)                    | ⇔ | 黙っている、緩和表現 (b 授受補助動詞)  |
| D | ▽ <相手の領域へ侵入> + <話し手の説明を無視している> + <表現が指示> (1) | ⇔ | 黙っている、緩和表現 (e 婉曲省略他)   |
|   | ▽ <場と内容の不適合> + <表現が指示> (11)                  | ⇔ | 黙っている                  |
|   | 「黙っている」                                      |   |                        |

- A. 多くの場面にある要素「当然の依頼だ」に、失礼ではない要素「簡潔な表現が良い」{依頼内容が良いことだ} が加わった時は、「～てください」が使われる (5, 9)。「～てください」が簡潔だ、と選ばれている場合以外は、「緩和表現」の「希望」も使われる (9)。
- B. しかし、「当然の依頼だ」に〈失礼だ〉の要素〈表現が指示〉〈用件レベル超え〉等が加わると、「～てください」は使われなくなっている (2, 3, ~)。また「用件レベルを超える」依頼には自己解決の「許可」の緩和表現が使われる (7, 8)
- C. さらに、〈失礼だ〉の要素をみると、〈失礼だ〉の要素が「配慮を要する」である時「黙っている」戦略が使われていることが多い (10, 4, 6)。
- D. そして、〈失礼だ〉の要素だけになると、控えめに「婉曲、省略」という緩和表現ではのめかすか、「黙っている」という戦略を取っている (1, 11)。

このように、「～てください」という表現は、緊急の場面や好意的に認められる内容である以外は使用されず、代わりに「緩和表現」が用いられ、その緩和表現も依頼の観点により、場面の固有の要素に応じた「希望」や「許可」表現の使用、また直接表現に近い「表現付加」から「婉曲、省略」まで間接性を調整していた。そして受け手の領域への侵入、場と内容が不適切、配慮を要するという要因では「黙っている」ことが分かった。

以上の結果から、学習者が日本社会で適切な依頼表現ができる為に気をつけるべき観点を結論としてまとめる。

## 7. 結論

本稿のまとめとして、学習者の危険な「～てください」を回避するために表現に関する要素を考察する。ここで、表7中「表現が指示」が含まれているパターンに▽を付した。依頼は、本来受け手のフェイスを脅かすものなので、それを緩和させる戦略をとることが必要であった。ところが本稿の主題、直接表現「～てください」は指示・命令寄りの表現なので緩和にはなりにくい。しかし学習者が「～てください」は「表現が指示」だ、ということを知らなければ「表現での失礼」を犯しやすい。即ち、日本語の、ここでは依頼の表現それぞれの持つ性格を知っていることが、使い分けるために必要だということである。この要素を「[I] 依頼表現の性格」とする。

また、▼のパターンには、表現以外に失礼さの要因が無い。「当然の依頼だ」と思う日本語学習者が、「～てください」と使いがちなパターンである。本稿のアンケートでは、「緊急な時は簡潔な表現が良い」(B&L,1987、岡本,1991)と、直接表現「～てください」は肯定されていた。しかし、それ以外は、「受け手から『良いことだ』と認められるだろう」と思っても「当然の依頼だ」「原因は受け手にあるのだから」と思っても、主に「緩和表現」を使う。この要素を「[II] 引く運用 (蒲谷,1998の「あたかも表現」)」とする。

一方、▽をつけた4例のうち▼以外の3例が内容の失礼さを伴っている。依頼発話する際に、表3の否定要因のような「その場面の表現以前の失礼さ」に気が付けば、表現は「失礼になりそうな時」は<アンケート②>で挙げた緩和表現 a~e で緩和を図り、失礼さの要因が強い場合は「黙っている」ことで、失礼さは避けられることになる。例えば、「第三者に配慮する観点」、「その依頼をその場では主張しないという運用選択」等その基準が

日本語学習者の母語社会に無い、または基準の程度が学習者の母国と違う（母国ではその程度なら気にしないので配慮表現を必要としない等）場合には、運用に際する日本語社会の社会言語学的判断を知る必要もあると思う。この要素を「〔Ⅲ〕その社会の規範」とする。

これら〔Ⅰ〕依頼表現の性格、〔Ⅱ〕引く運用、〔Ⅲ〕その社会の規範、について、日本語学習者が依頼をする際に知っておく必要があり、そしてこれらが「～てください」という表現が依頼として使われる際の違和感の要因であることが分かった。

では日本語学習者はこれらの要素を日本語学習の際にどの程度学習する必要があるのだろうか。次に、日本語社会での日本語のポライトネス論と合わせつつ、この問題を考える。

## 8. 日本語社会のポライトネスの特色とその学習に向けて

「日本語は、敬語が難しい」という日本語学習者は多い。確かに日本には、「上下親疎からなる（筆者加筆）『わきまへの敬語』の要素と、B&L（1987）の『世界の言語研究に於ける普遍的意味の敬語表現』による『距離をその時々で調節し、近づけたり遠ざけたりする働きかけのため』使用する要素」とがあり（井出，1987）、宇佐美（2001）は、「B&L（1987）の『世界の言語研究に於ける普遍的意味の敬語表現』は、『日本語の敬語』も含め、その運用を説明できる」と日本語のポライトネスを論じている。日本語学習者がどこまで日本語のポライトネス表現を使えるようになるべきか、という問題について、「学習者に日本語社会のポライトネス規範を押し付けるのではなく、学習者の選択に任せるべきだ。」「学習者が未熟なポライトネス表現を行なっても寛容に受け止める社会になることが必要だ」という意見もある。しかし、筆者は本研究を通し、「受け手に負担を負わせる依頼」について言えば、今現在の日本社会の中で生活する学習者にとっては、どのようなことに日本語母語話者は配慮して依頼を行なうのかを理解すること、そして日本社会で相手への配慮を表わすために種々の日本語表現が存在することを考えると、学習者が表現の役割を認識し、直面するコミュニケーションのトラブルや誤解を回避することが、やはり大切だと思う。

## 9. おわりに

本稿の目的は、日本語学習者が発話する「～てください」を使った依頼について、日本人の受け手が「失礼だ」と感じる原因を探り、学習者が失礼な依頼を回避できることであった。だが、本稿の調査では限定的な場と調査対象であった為、さらに広く一般の日本人を対象に場面を設定し、調査をすることが望ましい。また、紙面アンケートという調査方法に対し、「抑揚や口調などで違う」というコメントを頂いた。これらは今後の課題である。

さらに、学習者にこの「～てください」を含め各学習段階でどのようにポライトネスを提示すれば学習者が危険を免れ得るか、という提案に今回の研究では至らなかった。「～てください」を使わないばかりか、「黙っている」ストラテジーを取る等、文化的に使い分けの判断尺度が異なる場合の運用とともにこれらの研究を引き続き行なっていきたいと思う。

## 注

(注1) 筆者は、本稿文では以下、岡本の「間接形」を「間接表現」、「直接形」を「直接表現」と呼ぶことにする。

(注2) 「違う言い方」について

筆者は、アンケートから抽出された間接表現を次の5つ、a,b,c,d,eに分類した。

- a. 「～てください」に表現を足す。「すみません、～てください」や、程度軽減の副詞「ちょっと～てください」、理由付加「～ので、～てください」等。

(例) 先生、黒板に書いてください。(理由) なので…。すみません。

すみませんが、もう一度かけてください。

- b. やりもらいの補助動詞をつけ、肯定・否定疑問形にした形。「～て頂けますか」、「～てくださいませんか」等。

(例) 先生、黒板に書いて頂けますか。

- c. 自分の願望・希望を表出する形。「～たいんですが」「～てほしいんですが」

(例) 先生、もう一度聴きたいんですが。

- d. 自分の行動に対する許可を問う形。「～てもいいですか」

(例) 先生、エアコンをつけてもいいですか。

- e. 婉曲 (ほのめかし)

(例) 先生、ちょっと暑くないですか。

遂行動詞省略

(例) もう一度、いいですか。

代案・提案

(例) 後でお借りできませんか。

(エアコンを) つけましょうか。

違う遂行動詞・表現へ置き換え

(例) もう少しゆっくりお願いします。

状態説明

(例) 音が小さいんですが…

分類基準は文末表現「～てください」との距離を中心に、a,b.は遂行動詞を含み、a.は「～てください」がそのままの形で表現されているが、b.は遂行動詞は表出されているものの、授受補助動詞で遂行が緩和されている。c.～は、遂行動詞を含まないので、a,b.より間接的である、という分類方法を取った。また、アンケートの記載には a～e の複数の要素が重なっている場合があったが、文末表現「～てください」との距離を中心に分類した。例えば、「すみません、ちょっと暑いんですが…」は、a 付加表現「すみません」「ちょっと」と e「暑いんですが…」が使われているが、「～てください」の代わりの表現として a「すみません、ちょっと」の分類ではなく、文末の「暑いんですが…」に視点を置き「状態説明」として e.に分類する。また、本稿の視点は「～てください」と他の表現との距離なので、補助動詞間の丁寧度の違い (例えば、「～て下さいませんか」と「～て頂けますか」の違い等) については細分していない。

(注3) 表6の理由の中に見られる「思いやり」は、発話者自身が依頼する際に自分自身への思いやりを持つことは無いと思われる(思いやりは、受け手の日本語教師が抱いたものである)ので、依頼表現選択のための観点からはずした。また、表現の「教師」を「受け手」、「クラス」を「場」とした。

## 参考文献

- 石川有紀子・無藤隆(1990)「依頼表現の文脈依存性—その規定因としての役割関係—」『教育心理学研究』第38巻1号 日本教育心理学会
- 猪崎保子(2000)「接触場面に於ける「依頼」のストラテジー—日本人とフランス人日本語学者の場合—」『世界の日本語教育』第10号 国際交流基金日本語国際センター
- 井出祥子(1987)「現代の敬語論—日本と欧米の包括へ—」『月刊言語』7月号 vol.16. No.8 大修館書店
- 宇佐美まゆみ(2001)「ポライトネス理論から見た<敬意表現>—どこが根本的に異なるか」『日本語学』第20巻4号特集「<敬意>はどこから来るか」明治書院
- 岡本真一郎(1991)「要求と勧めの表現」愛知学院大学文学部紀要 20
- . (1989)「依頼表現の使い分けの規定因」愛知学院大学文学部紀要 18
- 柏崎雅世(1991)「(て)下さい」について—行動要求表現に於ける機能分析—」『日本語学科年報 13』東京外国語大学
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵(1998)『敬語表現』大修館書店
- 河戸 薫(1997)「依頼・命令・指示表現の日英比較—言語形式と推意の観点から—」『人間文化 H&S』9 神戸学院大学人文学会
- 金 河 守(1996)「日本語の依頼表現に於けるストラテジー—話し手による受け手考慮の側面から—」『筑波応用言語学研究』3 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科応用言語学コース [編]
- 姫野伴子(1991)「依頼と勧誘: 受益者表現の日英対照を中心に」『世界の日本語教育』第1号 国際交流基金日本語国際センター
- Brown, Penelope & Levinson, Stephen, C. (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press.
- Leech, Geoffrey, N. (1983). *The Principles of Pragmatics*. 池上嘉彦/河上誓作 (訳) (1987)『語用論』紀伊国屋書店